

どれみなのはなし

そのご



もくじ

まあるいみらい	3
ひとりのあした	9
しろいとりさん	14
ちいさなかあさん	19
なかがき	25
なつのえんがわ	26
あとがき	35

まえがき

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。

文字ばかりのどれみ本。世間から半年遅れでようやく『ドッカーン!』になりました。ババさまは無理でしたが、大きなハナちゃんにはなんとか出版もあります。

しかし全体通して恥ずかしい斬なのは相変わらず。苦手な方はすぐ本を閉じたほうがいいですよ、本気で。

それでも構わない方、ようこそ

『どれみなはなし』そのころ、どうぞご覧くださいませ。

酒処 金井亭亭主

猫好敬白

イラストレーション……久遠一海

まあるいみらい

「あれ？奥山さんどこ行くの？」

修学旅行の夜。部屋から出てゆくあたしに、どれみちゃんの声がかかった。

「うん。さわいでたら汗になっちゃったから、消灯の前に、ちよつとお風呂入ってくる」

行ってらっしゃい、の声の中、あたしはひとりでお風呂場に向かった。

「あ、もう閉まっちゃったかあ」

お風呂場の前には『準備中』のふだ。9時過ぎちよつてるんだよねえ。ちよつと失敗。

「ただ、えへへ。島倉さんから情報もらってるんだもんね。この奥に、っと。」

「あつたあつた。露天風呂」

先生が書いた『使用禁止』のふだ、ちよつとだけ後ろ向かせて。明かりはつけられないから暗い脱衣所に、あたしは入っていった。

「ふあああ〜」

気持ちいい。あんまり広くないけど、風と緑の匂いがする方がやっぱりいい。

「みんなも誘えばよかったかなあ？」

口に出してから笑っちゃった。あたしが入ると、あと2人でいつぱい、かな？

ぼ〜っと、ちよつとのぼせるくらいまで入ってから、洗い場の上がるところ。奥にある竹の壁がさがさって動いた。

「なに!？」

手もとのタオルと桶で体を隠しながら、あたしは竹の隙間をじつとみつめてみた。

「うわあああああ!!」

な、な、なに??

いきなり大きな声がして、竹の壁がさがさ動いて、その奥からばたばた足音 覗き!?

「きゃああああ!!」

叫びながら片手でお湯入りのオケを投げつけた。手こたえ、あつた。

「んぐおあつ!!」

嫌な声をあげて、誰かが落ちてゆく。

「ああああ あ?」

とっさに声を止められなくて、変な声を出しながら。恐いけど、あたしは壁に近づいていった。

竹やぶをさがさが分けてって、出てきた顔は

「さ、佐川!?!」

一瞬、目の前が真っ白になって、それから体が熱くなってきた。

「今の声はなんだ? だれか入ってるのかい?」

関先生の声が、遠くに聞こえる。けど、そんなの

関係ない。佐川が。佐川が。佐川があつ!!

「こ、この、ひきょう者おおおあつ!!!」

「奥山待ちな! 足はだめだ!!」

大きく後ろに振った足をひっぱられて、あたしはつんのめった。けど、いやだ。ぜつたい一発蹴ってやるんだああああ!!

10分後。あたしは関先生にかかえられて、佐川は西澤先生に運ばれて、先生たちの部屋に放り込まれていた。

「それじゃ、西澤 先生。そっちのほうは頼んだよ」

「まかせてください。それじゃ、お願いしまゝす」

楽しそうに西澤先生が出て行った。見送ってる関先生の方は苦い顔。

「ま、あれでそれなりに先生してるから、大丈夫か」

なんかぶつぶつ言ってるけど、聞く気ない。まったく、なんであたしまで　　そっか、露天風呂は立ち入り禁止だったっけ。

「ただ、あたしは覗かれたのよ。よりによって、佐川にっ!!」

「さて、と　　佐川、奥山のはだか見て、どうだった?」

「せ、せ、関先生!?!」
「い、いきなり何を!?!」

「こあら! 下向くんじゃない! ちゃんんと、奥山の目を見て」

「そっいえば佐川、さっきからずつとつむいてる。あたしは思いつきりにらみつけた。」

「せんせ、かんべんしてよあ〜」
「だーめ。これは罰なんだから。はいはい、ちゃんを見る!」

「ゆっくり上がってきた顔。もう、そんな、うさぎみたいな目で見ないでよ。　　あたしのほうが悪い」

「みたいじゃない。」

「どうだ? きれいだったかい?」

「こくり。佐川がうなづいた。」

「どんな風にきれいだった? 具体的に言ってみなよ」

「うん。なんか　　まるかった」

「こい　　つつわ! あたしは握りしめたこぶしをにらんだ。けど、関先生が」

「奥山も、下向かない!」

「だって、先生」

「露天風呂は使用禁止だったはずだよ。だから、奥山も罰を受けてもらわないとね」

「罰なら、覗かれただけでおつりがくるわ!」

「て言おうとしたけど、まじめな目でじつとみられちゃうと、ちよつと言えない。」

「じゃ、佐川、続けて。どこがまるかった?」

「佐川の口がもごもごって動いてから、ぎゅっと締まった。そのかわり目が動いてる。あたしの」

「目で思い出すんじゃないかって、ちや〜んと口で言いな」

ぺこん。

先生が丸めたノートで佐川を軽く叩いた。佐川の視線が、あたしの胸からはなれて、目を見つめてくる。

やっぱり、おどおどしたうさぎの目で。

「むねが、まるかった。むかしは、その、もっと、オレとおなじだったのに」

「なんか、顔が熱い。そんなこと、まじめな顔で言うんじゃないわよ。」

「それで目が離せなかったのかい？」

へえ それじゃ、気付かれてもないのに、な〜んであんな大声あげたんだい？」

「そ、それは」

「またも」もごしはじめて。ええい、言い訳くらいちやんとしなさいよ！ っと思つたそのとき、部屋のふすまがすっつと開いて、

「せんぱ〜い とりあえず、正座にしましたあ〜。これでいいですよね〜？」

また明るい声の西澤先生。

「ああ。修学旅行の罰つて言つたら、やっぱりそれだろ」

あたしたちには、こんな罰のくせに。

「太田くんと、佐藤くんと、佐川くん。三人だけみたいですよ」

「そうだろうね。で、最初に覗いたのが佐川なんだろう？」

また下を向きながら、こつくりうなづいてる。そうか、やっぱりSOSか。しかもこいつ、真つ先に覗いて、大声出して、見つかつて、みんなで逃げ出そうとして あれ？」

「どうだ佐川、恥ずかしいか？」

なんだか変。おかしい。関先生はくすくす笑つてるし、佐川はもう机にもぐるくらいうつむいちやつてる。

「ようし。もう覗きなんかすんじゃないよ」

こくこく、佐川の頭が何度も下がった。まあ、これでいいか。こいつも、約束は守るやつだし。

「見たいときはちゃんと話して、堂々と見せてもらうだね」

へ??

関先生はにやにやしながら、あたしたちをながめてたけど、

「じゃ、適当に戻りなよ。あたしは後片付けしてくるからね」

って言うと、西澤先生と一緒に部屋を出ていった。

あたしは、目の前の沈んだ佐川をみながら、なんかいやだなあ、って思っていた。

「なぐれよ」

先生が出て行ってしばらくしてから、佐川が下向いたまま、ぼつん、って言った。いつもよりさらに小さくて、体までうさぎみたい。

「あんたはもういいよ。約束したらちゃんと守る、って知ってるから。でも あゝあ。大田と佐藤には見られ損じゃない!」

もう。正座くらいじゃ足りないわ。あとでどうしてやるうか、って考えてたら、いきなり佐川が飛び上がった。

「見てねえよ!」

びっくりした。けど真剣な目が、あたしを真っ直ぐ見つめてる。

「見せるもんか 他のやつなんか」

こおゝいゝつわあぁ!よくもそんな恥ずかしいセリフを!!

「やつぱなぐるー!」

机を飛び越えたあたしを、佐川がさっとよけた。驚いた瞬間に、真剣な目がいつもの顔に変わっていく。

「こら、待て！」

あかんべをする佐川を追っかけながら、あたしは
なんだかほっとしていた。

—おわり—

ひとりのあした

「気がついたら、おれはドアの前に立っていた。

足元には赤いじゅうたん。ドアの脇には、白いプラスチックになにか書いてある。

「春風家 控え室？」

とにかく、中に入らなきゃいけない。おれはそう思った。

ノックしようとして腕を上げる。なんか窮屈だなあ。ああ、スーツ着てるんだっけ。こんなものめつたに着ないから。って、なんで着てるんだ、こんなもの？

なにがなんだかわからない。けど、なぜだか、どうしても中に入らなきゃいけない気がする。おれは一つ深呼吸してから、ドアを叩いた。

「あ 小竹くん」

ドアを開けると、小さな机の向こうに、きれいな女の人が座ってた。

床につきそうな長い髪をした、白いドレスの女人。見てすぐにわかった。この人は、どれみだって。だけど、おれは言葉が出なかった。それくらいきれいだったんだ。

髪をおろして、白いドレスに包まれて 白いドレス？いや、これって、あの、ウェディングドレスってやつじゃ？

ちよつと待てよ。おれのこの服 ってことは、その、え〜と。まさかおれ、これからどれみと??

「小竹くん、来てくれたんだ」

来て『くれた』？そう聞いた瞬間、ぐちゃぐちゃ考えていた頭が、さつと冷たくなった。

「怒ってるみたいだったから、式には来てくれないの

かと思つてた。へへへ、あなたはそんな人じゃなかつたよね」

来てくれないか。やつぱりだ。おれじゃ、ないんだ。そうか

「ねえ、小竹くん」

ああ、いけね。つい黙つちまつてた。

「これからも『小竹』って呼ばよな」

「うん。じゃ、もう本当に怒つてないんだよね？あの人のこと、ずっと紹介しなかつたから」

『あの人』。おれはたまらず飛び出すところだった。飛んでいって抱きしめなかつたのは、どれみの目を見ちまつたからだ。

本気で心配そうな目してる。忘れちまつてるみたいだけど、おれ、きつとすごく怒つてたんだろ。うな。

「もう、気にしてねえよ」

「そっか、よかつた」

ようやく笑つてくれた。だけど、どれみの顔はずこ

くおとなつぼくて、俺の知ってる笑顔じゃなかつた。そっか。俺の知らない間に、知らないところで、知らない奴と一緒に、大人になっていったんだな。遅かつた。おれは、遅すぎたんだ。どれみの結婚式までなにもできなかつたなんて、な。

よし。どうせ間抜けな笑いものなんだ。ちゃんと、最後まで笑われてやろう。

「どれ いや、春風さん」

「なにさ、あらたまつちやつて」

怒つてないのがわかつたからなんだろうな。すっかり気楽などれみに戻つちまつてる。言つなら、今しかない。

おれは軽く息を吸つた。途中でつつかえたら台無しだ。

「おれ じゃなくて ぼくは、ずっと前から、小さいころから、きみのことが大好きでした！」

「え ?」

言えた いつか言わなきゃいけなかったことば。もう、遅いんだけど。それでも。

さああと一言だ。がんばれ、おれ！

「 しあわせに なってくれ、よな」

逃げ出したかった。その場で振り向いて、そのままだとっか行つちまいたかった。

だけど、それをやつちゃダメだ。恥ずかしい笑われ者のおれを、ちゃんと、最後まで見せてやらなきゃ。

しばらく驚いた顔のままだったどれみの目から、なみだがこぼれてきた。それでも、笑ってる。

「 哲ちゃん、ありがと。ごめんね ごめんね」

笑った顔がかわいいな、って最後に思ったのはいつだったんだろう？ いま目の前ある笑顔は、すごくきれいだった。かわいい、じゃなくて。もう『ど

れみ』じゃない。本当にもう『春風さん』なんだ。

おれは、つむりそつになる目を無理に開いて、そのままドアノブをまわした。最後まで、このドアを開めるまで、こいつには明るい顔のおれでいたかった。

「あ、小竹くん」

控え室を出ると、聞きなれた声が聞こえた。顔を手でふいてから上げると、ドレスとスーツ姿が目に見えび込んでくる。藤原、妹尾、飛鳥 か。留学してるおんぷちゃんが揃えば、小学校に戻つたみたいだな。

「式には出ないノ？」

薄い黄色のスーツを着た飛鳥。こいつも、いつまでたっても日本語マスターしねえよなあ。でも、口の中で苦笑いしたら、ちょっとだけ気分が楽になった。

「ああ。言わなきゃならないことは、ちゃんと、言ったから」

「そう」

オレンジ色のドレスを着た藤原がそう言った。他のふたりが息をはいて、おれににっこり笑いかけてる。ほんとこいつら、おせっかい焼きだよな。しかたねえか。どれみの親友だもんな。

「元気出し！そんなやつたら、明後日の試合、勝てへんで!!」

青いスーツ姿の妹尾が、ばんばん背中叩きやがった。試合？ ああ、そうだった。俺、プロのサッカー選手になっただんだけ

「そうだよ。ファンの子たち、元気に動き回って小竹クン見てるんだから!!」

なんでだろうな。きょうはこいつらの表情がよく見えるや。

「だいじょうぶ。あさってはちゃんと活躍してやっからさー!」

だから、心配するなって。なんだか、どれみが三人に増えちゃったみたいじゃないか

「いいから、もう行ってやれよ。きょうの主役は、どれみだけ」

プロ選手になって、応援してくれるファンもいて。おれの夢は、夢の一つはかなったんだ。だけど。

おれはちよつとだけ振り返った。あの三人が、控え室に入っていく。

扉が閉まって、きゃいきゃい言う声が聞こえなくなっただけから、おれは天井を見上げた。

「おれ、一生結婚しないかもな」

「 えつ てつ！ほら、哲！おきなさい！」
いきなり、目の前が真っ白になった。鼻のおくが
痛い。目をこすってみたら、ぬれてた。

「ほら、早く起きる！今日から修学旅行でしょ!!」
おれは自分の手を見た。 ちいさい。さっきま
でと違う、小学生のおれだ。

「遅くない まだ遅くないんだ」
「十分遅いよ！外で木村君が待つてるじゃないか。
ほおら、さっさと起きて!!」

どうしたらいいかなんてわかんねえ。けど、俺は
今までどおりじゃいけないと思った。
修学旅行の間に、ちょっとでいいから、何かしな
くちゃ！

—おわり—

うしろとりさん

キイ

しろいとりさん、あるいてる。

まわりにはどれみがいる。はづきがいる。あいこがいる。おんぶがいる。ももがいる。

あ、そっか。これ、ハナちゃんちっちゃいときだ。うんづん、覚えてる。

ハナちゃんはおとりさん追いかけて、のんのしたかった。でもとりさん、あるいて行っちゃう。ハナちゃんはおんぶする。おんぶして、おんぶして、つかまえて、のんのする

ハナちゃんがおんぶすると、みんながよろこぶ。まわりじゅう、きらきらになるんだ。だから、ハナちゃんがおんぶする

あら？二階のほうから音がしたわ。

「ハナが起きたんかの？ララ、ちよいと行ってきてくれ」

はいはい。あたしはマジヨリカに、あきらめ顔でうなづいてから、二階に向かって飛んでいった。そして階段を白い影が、ぴよこん、ぴよこん、って降りてくる。

「おう、ハナや。起きたか」

マジヨリカが後ろから飛んできた。あたしはひよい、っと避けて、頭に着地。

「ちよっつと、おねぼうさんじゃない？」

笑いながら言ったら、ぶんつ、と吹き飛ばされた。

「まあいいじゃろ。今日はMAHO堂も休みじゃ。またまにはゆっくりするんじゃない」

ほくと、ハナちゃんには甘いんだから

「ん？何をしてるんじゃ？」
「あらら？そついえばハナちゃん、さつきから本を持ってきよるきよるしてるわね。」

「え？えへへえ」

「ハナちゃん、お料理するんだよ！」

「へえ、そつか。だんだん色々なことができるようになるのね。マジヨリカ、なんだかうまく言葉がでないみたい。あたしはまた頭にちよん、って乗っかって、代わりにおしゃべりすることにした。」

「ハナちゃん、料理作れるんだ」

「あゝいこに教えてもらったの。簡単だから、ハナちゃんでも作れるって。でね、覚えたから、みんなにおごちそつするの。」

「ごちそつ、ごちそつ。って楽しそうにくり返してるハナちゃんを見てると、あたしもなんだか嬉しくなっちゃう。足を組んでにっこり笑ってたら、また跳ね飛ばされた。もう！でも、涙を振り払ってるんじゃ、怒れないわね。」

「そつかそつか。で、なにを作るんじゃ？」
「ぴたつ。音がするくらい突然に、ハナちゃんが止まった。」

「首をかしげて、なにか思い出してる感じ。まさかとは思うけど、本当になに作るのか忘れてるんじや。」

「そつ思つて内心冷や汗かいていたところに、ぽんつ、という音が響いた。ハナちゃんが手を叩いたんだわ。」

「そつだ。ハナちゃん、とりさん探してきまゝす。」
「へ?? こんどはあたしたちの時間が止まった。その間に、ハナちゃんが裏の方へ歩いてく。」

「とり? なんのことじゃ?」
「あたしは肩をすくめて、ハナちゃんの方に飛んでいった。」

「とつりさん とつりさん」

歌いながら、みぎ、ひだり。しろいとりさん、どこかなあ？

「ハナちゃん」

ん？あ、ララだ。背中にぴと、ってひつついてきた。

「ねえハナちゃん、とりさんってなに？」

あれ？しらないのかな。ララも、マジョリカもいたんだよね？

「とりさんは、とりさんだよ。しろいとりさん。ちいちゃなハナちゃん、のんのしたでしょ？」

あ、なんか考えてる。思い出せないのかな？

そっか、きつとトシなんだね。

ハナちゃんがララの頭などでなでしようとしたら、ぴよんって手の上にとび乗ってきた。

「ハナちゃん。白い鳥さんって、ひよっとして

白鳥のこと？」

はくちよう？？はくく・ちゅ・つ。ん〜ん〜と。

「ほら、白くって、くちが黄色くって、目がおっきな

しろくて、くちが黄色くて、おめめおっきなの。うんうん。

「なるんだ。ララしてるんだ。ね、どこ？はくちようさん、どこ??」

あれ？ララ、頭に手あてちゃって、痛いのかな？

「MAHO堂の中で白鳥って言ったら、あれだけ、よねえ」

頭に両手あてて、なんかブツブツ言ってる。やっぱりトシなのかな？

「ララ、しってるならおしえて、どこ、どこ??」

「あたしの知ってる白鳥は納戸の中だけど、え？

ちよっと待って!!」

しってるのに、かくしちゃうんだもんなあ、もつ。

はくちようさん、はくちようさん、あつたあ

「ちよっとハナちゃん！それ、どいつするの??」

「おさらびに決まってるでしょ。ハナちゃんの、思い

出のおおびび

「ええええっ!!」

「どしたの、ララ?。」

ララのおめめ、まんまる。はくちょうさんと同じくらい。あそつか、ハナちゃんの思い出しらないんだね。

「ハナちゃんが、はくちょうさんとがんばると、みんなが応援するんだよ。がんばって、がんばって、がんばると、みんなにここにするんだよ。」

ハナちゃん、おごちそうががんばるの。だから、またはくちょうさんと、いつしよなの。」

あれれ? ララ、また頭に手あててる。すくく痛いのかな??

「ごっはん、ごっはん。」

ああ。ハナちゃん嬉しそうに、電気ジャーかき混ぜてるわ。

「ララ、なんで止めなかったのさ?。」

「ごこそ、つとどれみが寄ってきた。そんなこと言われても。」

「どれみだつて見たでしょ? あんなキラキラの目で言われて、ダメって言える??。」

むっ、つて不満顔のどれみが、ハナちゃんを目で追つてる。だから、しょうがないじゃない。もつ。

「ちゃんと洗わせたわよ。クレンザーと、中性洗剤でね。」

「洗ったからええ、つてわけでもないんやけど、なんちゅうたかて、おま。」

「ごっわあああ〜つ!!!」

はあ、き、聞こえたかしら?。そつとハナ

ちゃんの方を見たら、首をくいっ、て曲げてごっち見てる。

「どしたの、みんな? ああ。おなかすいちゃったんだね。も、すぐだから。まってまって。」

なんとか、気付かれなかったみたい。

「気持ち、その、わからないわけじゃないけど
ねえ？」

額に縦ジワ作ったはずきちゃん言った。そう、よねえ。マジヨリ力なんか、あたし以外の妖精みんな連れて、さっさとどつか隠れちゃったし。それにしても、よりによって

「おっなべつをぐるぐるかっきまっせて」

はあ。もう、純なハナちゃんがこんなに危険だなんて！

「だれよ、こんな料理教えたの」

ぼそつ、と言ったのはおんぷちゃん。考えることはみんな同じね。

「んなこと言つたかて、これ以上簡単な料理なんてあるかあ？」

わかっているってば。あたしはいちちゃんの肩にちょん、っと乗っかって、首のあたりを、ぼんぼん、ってたたいてあげた。

「あるわよ。たとえば納豆」

「はづきちゃん。それ以上言つたら、マジで親友やめんで」

「ナットウだつて、やつパリ」

「お願い。想像させないで」

ぼそぼそ言い争つてるけど、あたしにはわかる。運命の瞬間を、少しでも先に延ばしたいんだわ。だ
けど

「く、来るよっ!!」

どれみが小さく叫ぶと、とたんにみんな黙った。

しゅんとした緊張感の中、ハナちゃんだけが動いてる。

「とりさんの背中に、どぼどぼどぼっ」

あああ、完成しちゃう。ハナちゃん、せめて、せめてっつ

「お願いだから、カレーはやめてええっつ!!!」

—おわり—

ちいさなかあさん

今日もやっと学校が終わった。

残っててもしょうがない。おれはそのまま教室を出て行くとした。そこに、

「あ、矢田くん」

と、後ろから聞きなれた声。春風だ。あいつの声を聞くたび、なんだか疲れてくる。

「なんだ？」

「あの子、はづきちゃん、見なかった？」

「はあ？」

何言ってるんだ、こいつ？ たつたいま、授業終わったばかりじゃんか。となりの教室にいるに決まって

「あ、へへへ。「めんめん」。そうじゃなくてさ」

両手を大げさに振り回して、テレ笑いでやがる。なんだ？ と思ってたら、その後ろからひよこ、と顔が出てきた。

「はづきちゃん、このごろ学校帰りにどこか寄ってるの？」

「ど〜こいつてんのか、ハナちゃんにもわっかんない！」

はあ。おれは思わずため息をついた。ここ一年、飛鳥が増えただけで疲れが増してるとのに、最近巻機山まで加わって、声かけられるたびに人生短くなってる気がする。

「ね、なんか聞いてない？」

大きなだんご頭が目の前に迫ってくる。おれは思わず一歩下がっちゃった。

「知らねえよ。そんなこと」

「そっかあ〜」

「矢田くんにもナイシヨってことは、やっぱり何かやってルね」

「そなの??」

「そうそう。はづきちゃん、矢田くんにはぜったい隠しごとしないもん」

あゝ、うるさい。いるだけでどんどんうるさくなつてくる。おれはそのまま教室を出て、下駄箱に向かった。

校門を出たおれは、いつもの通り、ベットを取りに家に向かった。

のんびり歩いて、家が見えてきたころ。ようやく春風たちの声が頭から消えたな、と思いながら家を見ると、玄関が開いて赤いランドセルがとび出してきた。

「あれ?」

びよこん、と持ち上がった頭に、長いポニーテールがゆれてる。

「藤原じゃねえか」

気付いたら来るだろつ、と思って見ていたら、あいつはそのまま自分ちの方に走っていった。

なんだ、おれに用があつたのか。でも、おれより先に来てどうしようってんだ。学校で言えば待つてやるのに

「わかんねえヤツ」

ま、大事な用なら、あとで河原にでも来るだろ。おれはそう思いながら、玄関の扉を開けた。

うゝ、口ん中が痛え。

きのうはずーつとベット吹いてて、気がついたら2時間もたつてたからなあ。なのにあいつ、来やしなかった。なにやってんだらう、あいつは。

なにやってんだらう、おれは。

休み時間はなんとなく過ぎて、今日もまた帰りの時間。2組の教室に入ったら、藤原がいない。

「あれ、矢田くんじゃない。どうかしたの?」

「はづきちゃんやったら、もう帰ったで」

と、思ったら、瀬川と妹尾が、つづけさまに声をかけてきた。ったく、おれが2組に来るのは、あいつのことだけかよ。

まあいいや。それより

「ごんご、お前らと一緒にじゃないんだって？」
「ふたりがちよつとだけ顔を見合わせてから、ごんごちに振り返った。」

「ええ、3日前から毎日すぐに帰ってるんだって。ね、あいちゃん」

「そや。なんや知らんけど、きのうもおととも帰りの礼して頭上げたらもうおれへんねや」

ふう。普通にしゃべるだけ、まだごんごの方が春風たちよりましだ。これであいつがいれば、もっとラクなだけで

「矢田くん、なにか知らない？」

つと、いけね。変に考え事しちゃったみたいだ。

「べつに。じゃな」

おれはそのまま、家に帰るつもりだった。だけど、

「ああ、そつや。3日前の、調理実習のときからや」

妹尾の言葉に、足が止まった。調理実習？

「あら？ 矢田くん、帰らないの？」

「いいだろ、どうでも」

ふたりしておれを見てニヤニヤしてやがる。

はあ。もういいや。

「あいつ、実習で何かあったのかよ」

妹尾が腕を組んで考え出した。見ていた瀬川が手をぼん、と叩いて

「そういえばはづきちゃん、作ったたまご焼きの前で腕組んでたわよね。そんな風に」

「あ、思い出したわ。もう実習終わってんのに、何度も作り直してたんな。あたしが手伝おか言っても聞いてへんで、砂糖入れたり塩入れたり」

ふたりがおれを忘れてしゃべりだしたんで、おれは手を振りながら2組の教室を出た。そのまま下駄箱に向かって歩いていて、おれの頭の中になにか

引つかかった。ずっとむかし、なにかあったよう
な気がして

「たまご焼き、かあ」

「ただいまあ」

扉を開けて、なんとなく足元を見る。女子の靴が
ないのをぼんやり確かめて

「おかえりなさい。なに、やってるの？」

かあさんの声で、はっとした。

「べつに」

そう言いながら、顔が勝手に赤くなってく。まっ
たく、なにやってんだよ、おれは

「そう。で、すぐ河原に行くの？ それとも、何か
食べてから行く？」

靴をぬぎながら聞こえてきた声に、すぐ頭に浮か
んだのは、

「たまご焼き」

「なあに？」

いつの間にか目の前から消えたかあさんの声が、台
所から聞こえてきた。おれは、ちよつとだけ声を大
きくして、

「かあさん。あの　たまご焼き　作ってくれねえ
か、な？」

そしたら突然、かあさんの笑い声が響いてきた。

「かあさん!？」

台所から出てきたかあさんは、いまにも吹き出し
そうな顔してた。

「ふふふ　ごめんなさい。そうねえ。」

ん、やっぱり今はだめ」

「なあんで!？」

つい強く言っちまって、すぐ口を押さえた。だけ
どかあさんは、なんだか変なふうに笑ってる。

そう、ついさっきの妹尾と瀬川みたいに。

「我慢しててね。明日か明後日には、きつとできる

から」

わけわかんねえ。けどこのまま、にやにや笑われるのもいやだ。おれは部屋からベットを取ってきて、さっさと玄關を出た。

いつもの河原の橋の下。ベットの調子確かめながら、おれは別のことを考えてた。

たまご焼き。そういや、いまのかあさんに、作ってくれ、なんて言ったことなかったっけな。

「やべえ　かな」

口に出してみても、本当にやばいような気がしてきた。なんでだろう？　なんか、むかしあったような

「あ、そっか」

ベットのピストンをシユカシユカいじりながら考えていて、ふっと思いついた。そうだ、藤原のたまご焼きだ。

「泣かしちまったんだっけ、な」

幼稚園のころ、藤原んちで食ったんだ。いまでもちよつとだけ覚えてる。カラ入りでベタバタに甘いたまご焼き。皿ごと吹っ飛ばして、藤原がわんわん泣いて

いま思えば、おれを元気付けるつもりだったんだろ。なあ。かあさんが事故にあったあとで、気が立ってたし。

「ま、だいたい匂いが甘すぎなんだよな」

目をつむってベットを吹きながら、おれは、むかしのかあさんのたまご焼きを思い出していた。

かあさんのたまご焼きは、おやつみたいな甘い匂いじゃない。こほんが欲しくなるような、いい匂い

そう、ちょうどこんな　え!?

おもわずぱつと目を開けて振り向いたら、そこに目を丸くした藤原が立っていた。

「あ　ごめんなさい。おどかしちゃった？」

「べつに」

振り向いたときにぶつちまった歯を、口の中で確かめていたら、目の前に皿が出てきた。

「はい。これ」

「ん？」

たまご焼きだった。懐かしい匂いに、顔がふわっと包まれた。

「あ はい」

渡された箸を使って、一切れつまんで口に運ぶ。

ああ、そうだ。これなんだ。おれは目が熱くなるのを感じて、思わず腕でぬぐった。

「実習で作ったら、思い出しちゃって。まさる

くんのお母さんといっしょに、いろいろ試してみたのよ。あの匂い、おしょうゆだったのね」

それから少しづつ目をあげると、そこにいた。もう忘れかけていた姿が。

「かあさん」

目が開いていくにつれて、目の前の姿が、ちいさく、ちいさくなっていく。

「まさるくん、なにか言った？」

目をいっぱい開いても、そこにいたのは、ちいさなかあさんだった。

「べつに」

おれは川の方にむいて、ペットを構えた。息を吹き込むと、手が勝手に動く。出てきた曲はキラキラ星。

吹き終わって横を見る。石に腰かけた藤原が、笑顔でおれを見上げていた。

かあさんみたいな笑顔だけど、でも藤原だった。

—おわり—

なかがき

ここまでの4本は、web上で「どれみの小間物」として書いていたものの修正版です。「小間物」は小噺にするには短いネタを書くために作った場所ですが、文章表現の実験の場でもあったりします。一応、明らかな失敗作は載せていないつもりですが（^_^;）

以下、それぞれの話について、ちょっとだけコメントしておきますね。

- 『まあいいみらい』
 - 佐川くん、結構流されちゃうタイプかなあ、と思います。イタズラした相手の反応見て落ち込んでしまうくらいですからね。
- 『ひとりのあした』
 - 修学旅行での所業があまりにも（^_^;）でしたので、このぐらゐの理由があれば納得できるかな、と。
- 『しろいとりさん』
 - ハナちゃんを書くのは苦手なのですが、ドッカ〜ン！になった以上、避けて通れません。少しでも書きやすくするため、創作でよく使っていた一人称切り替え式を採用。パロディで使うには、もちょっと修行が必要なようです。
- 『ちいさなかあさん』
 - はづきちゃん。小噺の方であまりいい役回りになってませんので、せめて小間物では と思いながら書いたものです。でも、しゃべらせると遊んじゃうもので(^_^;) 本人の出番があまりありません。
 - 矢田くん好きなんですよ〜 無愛想でも、なんとなく行動がか〜いい矢田くんを書く！ というのが、目標の一つ。成功したでしょうか？

なつのえんがわ

「ハナちゃん、えんがわ欲しいの!!」

MAHO堂のドアが、ばん、って開いて、なんや
る思て見た瞬間、頭にひびく、ごっつい大声。いき
なりやったんで、みんなその場で固まってしもた。

ハナちゃんはそのままこっちに走ってくる。

「えんがわ?」

リボンフラワーほどこきながら言うてるはづきちや
んの脇、通り抜けて、

「ペランダならあるじゃん」

ヒをあさっての方に放り投げながら言うてるどれ
みちゃんの横、駆け抜けて、

ハナちゃんは、首を思つきり横に振りながらこっ
ちに向かつてきてる。

「縁側じゃないとだめなの?」

おんぶちゃんが言うてるそばに走り込んだと思た
ら、横に立ってたあたしに、そのまま頭から突っ込
んできてしもた。

くう〜!! あいかわらず手かげんなしやなあ、
ハナちゃんは

あたしがゲホゲホやってると、ハナちゃんは笑い
ながら顔上げて、

「うん♡ えんがわに、おみず入ったバケツ持ってき
て、花火するの」

聞いたみんなが、あたしと一緒にため息ついた。

こら、まあた誰かにいらんこと吹き込まれたんや
な。つたく、誰や?

「Yes♡ 日本ノ夏は、縁側で花火だヨネ!」

開きっぱなしのドアから聞こえてきたんは、いつ
もの弾んだ声　　なんや、ももちゃんかいな。

はあ　そやけど、縁側ちゅうてもなあ。

「あ、だったら私の家に来れば」

すぐそばで、はづきちゃんの声。いつの間にかハナちゃんの背中なでてる。

「そうじゃないのー！ハナちゃん、MAHO堂にえんがわ欲しいの!!!」

「そうソウ、MAHO堂の縁側 ワタシたちだけデ
花火♡」

「ありや、ももちゃんまで来とる。」

「ん〜」

縁側かあ。ハナちゃんのお願いやから、魔法なんかで出したないしなあ

「ねえねえ、あ〜いこ♡いいでしょ?」

つて、ハナちゃんが抱きついてくるんはともかく、

「ねえねえ、あいちゃん♡いいでシヨ?」

ももちゃんまで、すなっちゅつに。だいたい、なんでみんなあたしに言うんや?」

困ったなあ思てるわ。

「よあし、作っちゃおう!」

どれみちゃんがこっち来ながら言った。

不思議なもんや。どれみちゃんにそう言われると、なんでも出来るような気いになるわ。

「そやなあ。縁側言うからこっついもんと思っけど、要するに、スノコに足はやししたらええだけやん。板と柱あつたら、なんとかいけるんやないか?」

「作りかた考えながらちよこつと言つたら、いきなり首根っこにしがみ付かれてしもた。」

「うわは♡ホント!? あ〜いこ、えんがわ作つてくれるの?」

あはは 体は小6なんやから、もうちいと加減してくれへんかなあ。

マジヨリカに見つからんように、そつとMAHO堂の裏庭に出てみた。MAHO堂はもちろん洋風やけど、暗いところにスノコ置けば、それなりに見えんこともないなあ。ただ

「ああは言ったけど 材料どないしょ？」

花火はええとしても、材木買う、なんてマジヨリ力が承知せんやろなあ。

「あの、あいちゃん？ あれ」

はづきちゃんにつつかれて振り向いたら、 うあ。

「こらあ なんや？」

庭のすみ、板と柱が山んなってる。

「マジヨリ力じゃない？」

おんぶちゃん、冷静やな。

「なんか最近、親バカに磨きがかかってきたね」

どれみちゃんが、ため息まじりにぼそつと言ってる。あたしもあたま痛なってきたけど、

「ま、まあええわ。よおし、夜までにちやつちゃと作つたろ。」

ももちゃんとハナちゃんは、花火買ってきてや」

はづい、つちゆう声が、MAHO堂に消えてくんを見送つてから、どれみちゃんが、

「それじゃ、はづきちゃん、あいちゃん、はじめよ」

よっしゃー！、それじゃまず、大工道具持ってきて

「あら、わたしは？」

「え、あ、そつか。おんぶちゃんは、えいっと」

あかん、あたしも忘れてたわ。ももちゃんたち、もう買い物行つてしもたし

「おんぶちゃん、手伝ってくれるの？」

「なに、それ!？」

ああ、へソ曲げかけてるやん。はづきちゃんもなに不思議そうに言うてるのや、もう！

「おんぶちゃんは、あたしの手伝いや。納戸行って、大工道具探そな、な？」

「ええ、まあ。いいけど」

はづきちゃんが描いた縁側の絵見ながら、あたしが板をゴリゴリ切ってる横。さっきから、おんぶちゃんがだまって立ってる。

「はあ、失敗してもうたなあ。」

「そないむくれんと、な?」

おんぶちゃんの目をちらちら見ながら、またノコ動かして。最後の一枚切り終わったところで、隣のとんがった口から言葉が出てきた。

「わたしはただ、普通になっていただけよ」

あゝあ、そのままぶい、って横向いてしまよかった。しゃあないなあ。

「はづきちゃんやて悪気あつたわけやない、てわか
るやる? 最近、仕事忙しそうやから、みんな氣い遣
うてん」

言つてる途中で、いきなりばつ、と振り向いてき
た。げ、にらんどるう。

「だから! それが !!」

「おゝい、あいちゃん! スノコって、どうやって作
るんだっけ?」

ああ、どれみちゃん。天の助けやあゝ。

「あ、いま行くわあ! おんぶちゃん、じゃ、普

通でええから手伝うてや。たのむで」

時間置いて、氣いも落ち着くとええんやけどなあ

あたしは、そんなこと考えながら、どれみちゃんの方に走つてった。

「あいちゃん、こゝ、どつするの?」

どれみちゃんに、板の打ち方説明して戻ってきたら、今度ははづきちゃんに呼び止められた。ノコ持つて、柱を何本か組み合わせて ああ、足の組み方やな。

「あゝ、そこな。ちよいとホソ彫つて、つないだつたら」

「あら、はづきちゃんもノコギリ使うんだ?」

ぎく。 あかん、おんぶちゃんの声にビクビクなんてしたくないやけど。

「なんだか不思議。はづきちゃんって、こついつこ

としないように見えるのに」

はづきちゃんの顔、きよとん、ってな感じから、いきなり苦笑いになって、

「うーん そうね。MAHO堂に来なかつたらきつとしなかつたと思っわ」

ああ、そっか。最初があれやつたからなあ。

「こんなん、最初にMAHO堂を改装したときに比べたら、大したことあらへんて」

あたしが言つたら、はづきちゃん、笑いながら大きくうなづいてん。

「そっよね。あのときはもう、MAHO堂まるごと直しちゃったんだもの」

はづきちゃんが話しながらコリコリ、っとホソ彫つてくれた材木、あたしが仮組みして。スノコ持ち上げようとしたら、どれみちゃんがもう片方の足つけてた。

「そうそう、看板も、ドアも、レジだって作りなおしちゃったんだもん」

どれみちゃんも話しながら釘打ってる。

「あれ考えたら、こんなのへっちゃらだよな」

ほんまや。へっちゃら、ちゅより、楽しいくらいやな。

「へえ、そうなんだ」

おんぶちゃん、やつと落ち着いたみたいや。はあ、どうなることか思たけど

「あ、わたし上の板にニス塗っちゃうわね」

へ？ニス??んなもんあつたんか。そやけどあれ、おいキツいし、手につくと荒れてまうしなあ。おんぶちゃんにやつてもらうんはちょっと

「あ、おっとと」

ああ、ニスの缶に振り回されてるやん！やつぱあかんわ。

「も、もうええて、おんぶちゃん。白木の縁側ちゅうのも、それなりにええもんやし」

言いながらニスを戻そうとしたら、ぐん、っと引つ

張られた。

「なによ！ あいちゃん、いいかげんにして!!」

「ええええ!!」

「What's happen!？」

「なんやM A H O堂の方で「ちよちよ」言うてんけど、もう関係ないわ。だあぁぁ!! こおっのわからんちんがああぁ!!」

「そやから、さっきから言うてんやろが!」

「おんぶちゃんの手えが荒れるから、やめ、言うてるんが。」

「そんなこと言うてるんじやないわ! わたしの言うことちゃんと聞かないで、自分ばかり喋ろうとするから!!」

「ったく、まあっ!! なに言うても聞かんのはどっちや!!」

頭カッかきて思わずこぶし握りしめたそのとき、

「にいゝなれえゝ」

「ハナちゃんの声!?! 振り向いたそのとたん、体がふわっと軽くなった。」

「だいたい、あいちゃんは え?」

「な、なんや、なんやあゝ!!」

いきなり浮いたと思ったら、あたりがぱっとまっくらになつてしもた。

「じゅっ、目をこらしてみる。 おかしなあ。まわり見えてもええはずなんやけど。」

「しかもなんや、やたらきゅつくつやな。」

「頭ちよい、っと動かしたら、すぐ何かにぶつかつてまっ。ごろん、て転がる思ても、腕や足が固いもんにぶつかつてまっし」

「おんや? 下だけちよい柔らかいなあ。なんやろこ」

れ?どこがさわったような気がしますんのかけど」

「あいちゃん、重いんだけど」

「ああ!? そや、この感じ、おんぶちゃんや。」

「ご、ごめんなあ 痛ッ!!」

思わず飛び上がったら、あたま思いつきりぶつけてしもた。

「った〜!!」

う〜。手で押さえることもでけへんで、痛いのがまんしてると、下からくすくす笑い声。

「八ナちゃんの魔法で、どこかに閉じ込められちゃったみたいね」

「さつき八ナちゃんの声聞こえだし、きつとそやろな。しっかし、

「はあ。こんな狭いと、魔法使えへんなあ」

ふふふ

おんぶちゃんが、また小さく笑てる。

「さつきつから、なに笑うてんのや?」

「八ナちゃんの魔法、なにしかかったのかな、って考

えてたのよ。ね、なにをお願いしたんだと思う?」

「そら、八ナちゃんのことやから」

「あたしらが、仲良うなるように、かいなあ」

「うん。わたしもそう思う」

「またくすくす笑てる。はあ。なんやほつとするわ。いまやったら、話聞いてくれるかもしれんなあ。」

「な、おんぶちゃん。おんぶちゃんと会う前のあたしら、ほんま全部手作りやったんや」

「うん」

「せやからな、ノコとか持つてくると、どうしても昔のこと思い出してまうんや。おんぶちゃん仲間はずれなんて、誰も思てへんで」

「わかってる」

「なんや、えらいすなおやな? どうせ顔見え

へんのや、ええい、最後まで言つたれ!

「だいたい、考えてみいや。おんぶちゃんが来てからの方が、もう長いねんで?」

「ちよつとくらい思い出さったって、どうってこと

ないやん。これから作る思い出の方が、ずっと、ずっと大切やんかー」

「 あいちゃん? 」

「 んー? 」

「 そんなこと、よく真顔で言えるわね 」

ぐつ。 あんゝなあああー! ひとがまじめに言うてんのに!!

「 わたしには、とてもまねできないわ 」

はあ、そうやった。なかなか言葉で言うてくれへんからなあ。そやけど、あたしは

「 あたしは、おんぶちゃんがなに思ってるんか、いつでも考えてんでー 」

あはは。顔見えへんと、なんでも言えるもんやなあ。

「 それじゃ、きょうわたしが一番つらやましかったこと、なんだかわかる? 」

一番かあ、なんやろなあ、って考えてたら、

ぎゅっ♡

首におんぶちゃんの手が回ってきて、ほっぺたがくっついてきてん。

「 ハナちゃんだったら、いつでもできるのにね 」

顔は見えへんけど、あたしにはわかった。おんぶちゃんもきつと、あたしとおんなじ顔してる、て。

「 おゝい、もしもゝし 」

ん? どれみちゃんの声や。近くにおるんやな?

おんぶちゃんの腕が、いきなり首からどいた。

「 どれみちゃん、そこにおるんか? 助けてえな 」

「 え? なに? 」

「 助けて、って言うてるみたい 」

はづきちゃんもいるんか。でも、声は届いてない

みたいや? よあし、それなら大きな口パクで、た・

す・け・て!!

「 いや、助けてもなにも 」

「どうして出てこないの？」

へ??

ふわつと、なにかさわつたような感じがしたあと、いきなりまわりが見えるようになった。

頭の上には、スノコ板。板のすきまから、お月さんとどれみちゃんたちがのぞいてる。

「つてことは　ここ縁側の下かあ!？」

「　ひよつとして、外からはずつと見えてた、なんて言わないわよね?。」

「ずつと見てたわよ♡」

はづきちゃんのめがねが光ってる。それはええけど

ど　その♡は、なんや?」

「やっと声聞こえたわ。ふたりでなにしてたの?。」

「な、なんでもあらへんて」

「そ、それより、もう夜よ。花火は　?。」

あたしを押し上げてるおんぶちゃんがそう言ったら、みんなあたしから目えそらした。

「あ、あはは　いや、ほら、花火よりさ、あい

ちゃんたち見てる方が面白くなっちゃって。で、気がついたら　」

「ハナちゃん、ももといっしょに、花火ぜんぶやっちゃった!。」

「んなあほな!!」

パキッ

へ? 『パキッ』??

思わず起き上がったら、脇の柱が折れてしまった。さつきはビクともせんかったのに。

「あゝ!　あゝいこが、こわしたあ!!」

「わあた、わあたつて。あたしらがあとで直したるから。な、おんぶちゃん」

半分になつてもた縁側しよつて手え貸してたら、両手でしっかり握りながらおんぶちゃんが言った。

「　うん　」

—おわり—

あとがき

文字だけのどれみ本も、薄いとはいえこれで5冊目。コミケに出すのも4回目で、初のどれみ系スペースです。

本当はすべて新しいネタ¹で頑張りたかったのですが、くじけました。なかがきに書いてあります通り、前の4本はwebに上げてあるものの修正版です。

個人的には、書き直せてよかった部分もあったりしますが時間がなかったわけでなし、言い訳できませんね。ごめんなさい。

今回は小間物を作って、あまり制限なしに書くようにしたため、ネタの元段階で止まっていたものをだいた文章にできました。あと書いてないネタと言えば、「木村くん まりなちゃん」や「元老院s茶飲み嘸」、ず~とあっためてる「お父さんs親バカ嘸」といったところでしょうか。

もちろん「あい おん」ネタは限りなくあるわけですが、小間物に押し込むのが逆に難しくて(^_^;) ついつい時間がかかってしまいます。誕生日ネタなんていう、時期がずれると意味のないものもありますし、これからも小間物で調整しながら、なんとか書いてみましょう。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまった方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

¹ 「なつのえんがわ」は後日修正することになりそうです。申し訳ありません